

# 鳥取県医師会報

MONTHLY JOURNAL OF TOTTORI MEDICAL ASSOCIATION



平成24年10月15日発行(毎月1回15日発行)  
昭和60年11月28日 第三種郵便物認可  
ISSN 0915-3489

鳥取県医師会長 岡 本 公 男  
学会長 医療法人同愛会 博愛病院院長 角 賢 一

## 平成24年度鳥取県医師会秋季医学会 (日本医師会生涯教育講座)

標記の秋季医学会を下記のとおり開催致しますので、ご案内申し上げます。  
会員各位始め、多数の方々にご参集頂きますようお願い申し上げます。

**期日** 平成24年11月11日(日) 午前9時30分

**場所** 鳥取県西部医師会館  
米子市久米町136番地 TEL0859-34-6251

**日程** 開 会 ● 9:30  
挨拶 ● 9:30  
一般演題 ● 9:35~11:45  
特別講演 ● 11:50~12:50  
「消化器癌における機能温存手術とその問題点」  
鳥取大学医学部器官制御外科学講座病態制御外科学分野  
教授 池 口 正 英 先生  
閉 会 ● 12:50

- \* 一般演題 16題
- \* 日本医師会生涯教育講座  
取得単位 3.0単位  
取得カリキュラムコード  
11 予防活動 12 保健活動 19 身体機能の低下  
25 リンパ節腫脹 27 黄疸 45 呼吸困難

\* このプログラムは当日ご持参下さい。

鳥取県医師会医学会

# プログラム

開会・挨拶 9:30 鳥取県医師会長 岡本 公男  
学会長 角 賢一（博愛病院 院長）

## 一般演題（口演5分）

1. 小児疾患 9:35～9:56 座長 長田 郁夫（子育て長田こどもクリニック）
  - 1) 小児の日帰り全身麻酔—開業医での導入  
米子市 ながい麻酔科クリニック 永井 小夜 他
  - 2) 非チフス性サルモネラ腸炎の検討  
博愛病院 小児科 飯塚 俊之 他
  - 3) すべてのお子さんに「B型肝炎ワクチン」接種が必要です！  
境港市 岡空小児科医院 岡空 輝夫
2. 肝疾患 9:59～10:20 座長 細田 明秀（細田内科医院）
  - 4) 術前診断に苦慮した硬化型肝細胞癌の1例  
国立病院機構 米子医療センター 消化器内科 松永 佳子 他
  - 5) 急性肝炎様発症し、再燃時に診断できた自己免疫性肝炎の1例  
博愛病院 内科 堀 立明 他
  - 6) 当院におけるC型慢性肝炎に対するテラプレビル／ペグインターフェロン／リバビリン3剤併用療法の経験  
山陰労災病院 消化器内科 岸本 幸廣 他
3. 循環器疾患 10:23～10:44 座長 小竹 寛（小竹内科循環器クリニック）
  - 7) たこつば型心筋症に心腔内血栓を合併した1例  
山陰労災病院 循環器科 山口 恵美 他
  - 8) クリニックにおける心血管病のスクリーニング：有用性と問題点  
三樹会吉野・三宅ステーションクリニック 吉野 保之 他
  - 9) 暑熱条件下における持久運動が人体の体液組成および腎機能に与える影響の検討  
清生会 谷口病院 内科 野口圭太郎
4. 血液・悪性腫瘍 10:47～11:01 座長 川谷 俊夫（かわたに医院）
  - 10) 急激な転帰をとり病理解剖にて確定診断を得たびまん性大細胞型B細胞性リンパ腫の1例  
米子市 とみます外科プライマリーケアクリニック 廣田 裕 他
  - 11) グリベック®（イマチニブ）投与により腫瘍の進行を抑えることができた、再発を繰り返し計4回の腸切除を施行した子宮平滑筋肉腫の1例  
博愛病院 外科 星野 和義 他

5. 診断 11:04~11:18 座長 石井 敏雄 (旗ヶ崎内科クリニック)

12) 胸部CTで偶然発見された上腹部所見の検討

博愛病院 放射線科 中村希代志

13) アミノインデックスを用いたプレがん検診の有用性について

国民健康保険西伯病院 外科 木村 修 他

6. 整形外科疾患 11:21~11:28 座長 瀧田 寿彦 (瀧田整形外科医院)

14) 腫瘍用人工関節置換術後に深部感染をきたした4例

国立病院機構 米子医療センター 整形外科 南崎 剛 他

7. 高齢者医療 11:31~11:45 座長 安達 敏明 (安達医院)

15) 終末期リハビリテーション②; パーキンソン病等神経難病患者の胃瘻造設における意思決定過程について

大山リハビリテーション病院 神経内科・内科 佐藤 武夫 他

16) ホスピタウンにおける百寿者の健康管理について

米子市 真誠会セントラルクリニック 中下英之助 他

特別講演 11:50~12:50 座長 角 賢一 (博愛病院院長)

「消化器癌における機能温存手術とその問題点」

鳥取大学医学部器官制御外科学講座 病態制御外科学分野  
教授 池口 正英 先生

## 一 般 演 題

1. 小児疾患 9:35~9:56 座 長 長田 郁夫 (子育て長田こどもクリニック)

### 1) 小児の日帰り全身麻酔—開業医での導入

米子市 ながい麻酔科クリニック <sup>ながい</sup>永井 <sup>さよ</sup>小夜  
米子市 辻田耳鼻咽喉科医院 辻田 哲朗  
米子市 林原医院 林原 伸治

われわれは小児の鼓膜チュービングやレーザー治療に対して日帰り全身麻酔を導入しているので報告する。方法：主治医医院で全身麻酔下治療の決定後、麻酔科医院で麻酔前診察と検査を行う。当日は主治医医院あるいは麻酔科医院で全身麻酔下治療を行い、十分回復した後帰宅する。当日夜に麻酔科医が電話で患児の状態を確認して管理終了とする。結果：2006年11月から2012年9月までで158例が対象となった。術後の嘔気持続などで3例が米子医療センター、鳥大病院を受診したが、全例帰宅可能であった。考察：開業医同士の日帰り全身麻酔は、固定したスタッフによる綿密な管理が可能であり、患児とその家族にとって最小限の生活環境の変化で全身麻酔下治療を受けることができる。安全に行うために症例の選択、手術麻酔環境の整備、丁寧な周術期管理を心掛けているが、不測の事態において近隣病院に協力いただけることは非常に心強く感じている。

### 2) 非チフス性サルモネラ腸炎の検討

博愛病院小児科 <sup>いいつか</sup>飯塚 <sup>としゆき</sup>俊之 福永 真紀 原田友一郎 渡邊 淳子

2010年5月から2012年8月までに当科で診断した非チフス性サルモネラ腸炎小児を検討した。対象は観察期間中に便培養で非チフス性サルモネラが検出された小児4例。男1例、女3例、年齢は1, 3, 9, 11歳、発症時期は7, 8, 8, 11月、全て散発例で、血清型は0-4と0-8がそれぞれ1例、不明が2例であった。頻回の下痢と血便を呈した2症例で入院を必要とした。腸管外感染症の合併は認めず、全例軽快した。感染経路としては、生の鶏肉やカメとの接触歴（前者は舐める、後者は遊ぶ）がある症例を1例ずつ認め、このような病歴をもつ夏の胃腸炎小児例では、サルモネラ腸炎を考慮すべきと考えた。

### 3) すべてのお子さんに「B型肝炎ワクチン」接種が必要です！

境港市 岡空小児科医院 <sup>おかそら</sup>岡空 <sup>てるお</sup>輝夫

HBs抗原陽性のお母さんから生まれた赤ちゃんを母子感染から予防するために、1986年から母子感染予防事業によるB型肝炎ワクチンの接種が始まり、母親からの垂直感染は確実に減少してきた。しかし、母親以外の家族や友達などからの感染や感染源がはっきりしないことも相当数あることがわかってきた。そのため、WHO（世界保健機構）では子どもたち全員へのHBワクチン接種（ユニバーサル・ワクチネーション：HB-UV）を勧めている。岡空小児科医院では2009年9月から当院受診者の方にHB-UVを勧め、希望者への接種を始めた。開始当初は境港市内の子どもたちだけであったが、昨年の秋以降希望者が増加し、

他市町村からの接種希望者も増えてきた。当院でのHB-UV 3年間のまとめを報告し、あわせてHB-UVの必要性を訴えたい。

2. 肝疾患 9:59~10:20 座長 細田 明秀 (細田内科医院)

#### 4) 術前診断に苦慮した硬化型肝細胞癌の1例

国立病院機構 米子医療センター消化器内科 松永<sup>まつなが</sup> 佳子<sup>よしこ</sup> 香田 正晴  
片山 俊介 山本 哲夫  
同 外科 久光 和則

症例は60歳代男性，主訴なし．現病歴：平成X-1年8月，人間ドックで指摘された肝左葉の45mm大 SOLの精査目的に当科受診，精査の結果血管腫と診断し，半年後の経過観察を指示した．平成X年3月，経過観察のため再診され腹部エコーを施行したところ，腫瘍は5.8cm大へ増大していた．現症では特記すべき所見なし．血液検査所見：WBC 5,200/ $\mu$ l, Hb 14.7g/dl, PLT 189,000/ $\mu$ l, AST 24IU/l, ALT 37IU/l, ALP 165 IU/l, LDH 117 IU/l, AFP 3.9ng/ml, PIVKA-II 22mAU/ml, CEA 2.8ng/ml, CA19-9 7.2U/ml, HBsAg(-), HCVAb(-), 画像診断では肝左葉に径5.8cm大の不整な高エコー腫瘍があり，CTでは腫瘍周囲より徐々に造影されるも乏血性，MRIでは腫瘍はT1Low, T2 High intensityを呈していた．肝生検：高分化型肝細胞癌あるいは異形成？ 経過：確定診断は得られなかったが，短期間で増大していることより悪性腫瘍を強く疑い，外科で左肝切除術が施行され組織学的に硬化型肝細胞癌と診断された．非癌部は正常肝であった．若干の文献的考察を加え報告する．

#### 5) 急性肝炎様発症し，再燃時に診断できた自己免疫性肝炎の1例

博愛病院内科 堀<sup>ほり</sup> 立明<sup>たつあき</sup> 楠本 智章 大谷 英之  
浜本 哲郎 鶴原 一郎 周防 武昭

症例30歳代女性．2008年10月全身倦怠感，食欲不振，黄疸にて来院，T Bil 7.9, AST 1,002, ALT 2,411と著明な肝障害がみられた．飲酒歴，服薬歴なく，HAV, HBV, HCV, EBV, CMVも否定された．ANAは80倍と陽性であったが，IgGは正常であり肝生検は施行しなかった．2か月間で肝機能は正常化し，6か月間正常が持続したので治癒と判断された．2011年11月健診にてAST 83, ALT 168を指摘され再度来院．ANA 320倍，IgG 1,616と高値であり，肝生検にて慢性活動性肝炎の所見がみられ，自己免疫性肝炎と診断し，プレドニソロン投与にて肝機能は急速に正常化した．6か月後のIgG 1,028, ANA 80倍の時点で再度肝生検を実施したが，活動性肝炎像は持続していた．自己免疫性肝炎では急性肝炎様の発症を示す例が存在し，肝機能が正常化しても肝組織は異常が持続するので注意が必要である．

## 6) 当院におけるC型慢性肝炎に対するテラプレビル／ペグインターフェロン／リバビリ ン3剤併用療法の経験

山陰労災病院消化器内科      きしもと ゆきひろ  
岸本 幸廣      西向 栄治      田本 明弘      角田 宏明  
向山 智之      神戸 貴雅      謝花 典子      古城 治彦

平成23年11月、プロテアーゼ阻害剤であるテラプレビルの使用が認可され、難治性であるHCV grouping 1、高ウイルス量のC型慢性肝炎に対する治療の飛躍的な向上が期待されている。しかし、その一方貧血、皮疹、腎機能障害など重篤な副作用も報告されている。鳥取県西部医療圏においては、皮膚科医との連携問題があったため、他の都府県に比較して治療の進捗が約半年遅れている。当院では、H24年6月から3剤併用療法を開始したが、その使用経験について報告する。9月初旬までに8症例に導入した。4週目のHCV RNA (TaqMan) が検出感度以下になったのは、結果が判明した6例中4例であった。

## 3. 循環器疾患      10:23~10:44      座長 小竹 寛 (小竹内科循環器クリニック)

### 7) たこつぼ型心筋症に心腔内血栓を合併した1例

山陰労災病院循環器科      やまぐち めぐみ  
山口 恵美      遠藤 哲      森下 孝臣      水田栄之助  
足立 正光      尾崎 就一      太田原 顕      笠原 尚

症例：70歳代女性。現病歴：糖尿病あり、外来定期受診していた。1週間前より歩行時息切れを自覚。平成24年8月外来定期受診時、心エコーにて左室心尖部の無収縮および心基部過収縮を認めた。冠動脈造影で著変認めず、たこつぼ型心筋症と診断。経過中、心エコーにて左心室内に11×6 mmの血栓を認めたため、ヘパリンおよびワーファリンによる抗凝固療法開始。第4病日に心エコー再検したところ血栓は消失していた。抗凝固療法開始後短期間であり血栓が溶解した可能性は低く、左室壁より遊離したと推定したが、特に塞栓症状は認めなかった。たこつぼ型心筋症において心腔内血栓は比較的まれだが注意すべき合併症であるため、若干の文献を交えて報告する。

### 8) クリニックにおける心血管病のスクリーニング：有用性と問題点

三樹会吉野・三宅ステーションクリニック      よしの やすゆき  
吉野 保之      中村 勇夫      三宅 茂樹  
鳥取市 宍戸医院      宍戸 英俊

人口の高齢化と糖尿病の増加により慢性腎臓病（以下、CKD）が増え、心血管系の救急患者や手術後における血液浄化療法の必要性が増している。CKDは心血管病の独立した危険因子であり、CKD管理と共に心血管病の早期診断・治療は重要である。われわれは、CKD5Dである透析患者の心血管病のスクリーニングを一次は循環器病の診断が可能なクリニックで主に施行し、二次を病院で行っており、その結果を本学会において報告して来た。今回は、このスクリーニングの意義、問題点を検討する。

## 9) 暑熱条件下における持久運動が人体の体液組成および腎機能に与える影響の検討

清生会 谷口病院内科 <sup>のぐちけいたろう</sup>野口圭太郎

方法：31歳から59歳の暑熱馴化が十分に進み、普段からランニングの習慣がある男女14名を対象に暑熱条件（WBGT 31.8℃）下で2時間走を実施。運動前後で採血、採尿を行い、電解質、血清クレアチニン、尿中NAG、尿中アルブミン値などを測定し、運動前後での比較を行った。結果：自由に給水できる環境だったにも関わらず、運動後は $2.1 \pm 0.9$ kgの体重減少が見られ、血清Cr値の有意な上昇を認めた（運動前 $0.7 \pm 0.2$ mg/dl 運動後 $1.1 \pm 0.4$ mg/dl  $p = 0.00005$ ）他、尿中NAG、尿中アルブミンも運動後に有意な上昇を認めた。考察：暑熱条件下での持久運動は運動習慣がある者でも脱水を伴って腎機能の低下、腎組織の傷害を引き起こす。予防のためには自律的な給水ではなく、時間ごとの強制飲水などを考慮する必要がある。

## 4. 血液・悪性腫瘍 10:47~11:01 座長 川谷 俊夫（かわたに医院）

### 10) 急激な転帰をとり病理解剖にて確定診断を得たびまん性大細胞型B細胞性リンパ腫の1例

米子市 とみます外科プライマリーケアクリニック <sup>ひろた</sup>廣田 <sup>ゆたか</sup>裕  
博愛病院内科 堀 立明  
同 外科 角 賢一  
鳥取大学病理学講座分子病理学分野 加藤 雅子 林 一彦  
鳥取大学大学院医学系研究科機能再生医科学専攻再生医学 久留 一郎

80歳代女性。しばしば誤嚥性肺炎と考えられる発熱を繰り返していた。死亡前月も38℃に至る発熱を繰り返し、抗生剤にて加療していたが、意識レベル低下、経口摂取量著減し、著明な肝腫大、肝機能障害出現。その後、意識状態が悪化したため入院となった。画像診断にて、肝腫大、胸腹水を認め、急速に肝機能障害が進行。さらに播種性血管内凝固症候群（DIC）を併発、第9病日死亡した。死因を同定するため病理解剖を施行した結果、脾臓原発のびまん性大細胞型B細胞性リンパ腫（以下DLBCL）との診断を得た。DLBCLは中悪性度リンパ腫に分類され、月単位で進行するとされる。本症例は表在リンパ節の腫脹もなく、死亡直前は急激な経過をたどり、リンパ腫の診断は非常に困難と思われるが、それ以前に鑑別診断のひとつとする必要があった可能性がある。

11) グリベック® (イマチニブ) 投与により腫瘍の進行を抑えることができた、再発を繰り返し計4回の腸切除を施行した子宮平滑筋肉腫の1例

博愛病院外科	星野 和義 <sup>ほしの かずよし</sup>	山田 敬教	安宅 正幸
	角 賢一		
同 内科	楠本 智章		
同 産婦人科	石原 幸一		
同 薬剤部	加藤 淳一		
福山市医師会診断病理学センター	元井 信		

症例は、50歳代女性で、平成21年、子宮平滑筋肉腫にて腫瘍および単純子宮全摘、両側付属器摘出術が施行された。平成23年、再発による腸閉塞に対して、腫瘍摘出術、広範小腸切除術を施行した。その後も再発を繰り返し、計5回（腫瘍および腸管切除4回）の手術を行った。術後、分子標的薬のグリベック®（イマチニブ）を投与し、腫瘍の進行を抑えることができた。しかし、3か月後再発し、腸閉塞による腸切除術を施行してから1年後に死亡した。子宮平滑筋肉腫は、子宮の悪性疾患の中でも最も予後不良とされる。また、まれな疾患であり治療方針が確立されていない。一旦治療法がないと判断された患者が手術により普通の生活に戻ることができ、手術は有用な治療法と思われた。さらに、グリベック®（イマチニブ）を投与することにより腫瘍の進行を抑えることができ、分子標的薬も治療法の1つに挙げられるものと思われた。

5. 診断 11:04~11:18 座長 石井 敏雄（旗ヶ崎内科クリニック）

12) 胸部CTで偶然発見された上腹部所見の検討

博愛病院放射線科 <sup>なかわらきよし</sup> 中村希代志

近年、画像診断の進歩により検診や他病変の精査目的に施行された各種画像検査において、予期せぬ部位に病変が発見される機会が増加している。今回、胸部の精査目的に施行されたCT検査で、上腹部に認められた所見について検討したので報告する。対象は2003年4月から2012年10月までに当院で胸部CTを施行した症例とした。有意な所見（さらなる精査や治療が必要であった所見）としては、肝腫瘍、腎腫瘍、総胆管結石、腹水などが認められた。臨床的にあまり有意ではない所見としては、肝嚢胞、腎嚢胞、胆石、脂肪肝等が多かった。胸部CTの読影に際しては、上腹部も含めた撮像範囲全ての所見を拾い上げることが必要であると考えられた。



### 13) アミノインデックスを用いたプレがん検診の有用性について

国民健康保険西伯病院外科 木村<sup>きむら</sup> 修<sup>おさむ</sup> 村田 裕彦 堅野 国幸  
同 内科 陶山 和子 山本 司生 宇田川晃秀  
田村 啓達 野坂 薫子 田村 矩章  
味の素株式会社アミノインデックス部 安東 敏彦

近年、血中アミノ酸の分析法が急速に進歩し、血漿中アミノ酸バランスの変動を解析し疾病の可能性を把握するアミノインデックス技術が報告されている。現在、このアミノインデックス技術をがんのリスクスクリーニングに応用したAminoIndex Cancer Screening (AICS) が胃癌、肺癌、大腸癌、前立腺癌、乳癌、子宮癌・卵巣癌において臨床実用化されている。今回、われわれは鳥取県と南部町のご協力をいただき、40歳以上の住民を対象にプレ癌検診としてAICSの測定を開始し興味ある知見を得ているので報告する。本年1月から8月までにAICSが測定された方は当院465名、集団検診445名、町外78名、計988名であり、がん罹患している確率が高いランクCの方に対しては可能な限り精密検査を施行し、前癌病変を多数認めている。また、今後もAICSによりがん発生のリスクを知った上でのがん検診を勧めていきたいと考えている。

### 6. 整形外科疾患 11:21~11:28 座長 瀧田 寿彦 (瀧田整形外科医院)

#### 14) 腫瘍用人工関節置換術後に深部感染をきたした4例

国立病院機構 米子医療センター整形外科 南崎<sup>みなみざき</sup> 剛<sup>たけし</sup> 山家 健作  
吉川 尚秀 山下 尚寛

整形外科領域では、人工関節置換術後の深部感染は、最も重篤な合併症の一つである。その中でも悪性腫瘍の広範切除後に機能再建で行った場合には、筋肉がないために皮膚直下に人工関節が存在し、治療に難治性で、予後不良である。今回、当院で経験した深部感染4例について検討した。原疾患は軟部肉腫2例(類上皮肉腫、骨外性軟骨肉腫)、骨原性肉腫2例(小円形細胞肉腫、骨肉腫)であった。起炎菌は全例に同定でき、このうち黄色ブドウ球菌が2例と多かった。3例は早期感染、1例は遅発性感染と診断した。最終結果として1例は切断に至り、残る3例は患肢温存ができています。しかし、3例中1例は慢性骨髓炎を合併しており、現在も抗生剤の内服で経過をみているため、今後追加手術を要する。

7. 高齢者医療 11:31~11:45 座長 安達 敏明 (安達医院)

15) 終末期リハビリテーション②; パーキンソン病等神経難病患者の胃瘻造設における意思決定過程について

大山リハビリテーション病院神経内科・内科 <sup>さとう たけお</sup> 佐藤 武夫  
同 看護師 金山 志保 小林真理子  
門脇千恵子 大原 誠

当院療養病棟（第二病棟）には高齢者非癌患者の終末期にあつて、人生の最後まで人間らしさを保証する終末期リハビリテーションの対象となっている患者が多い（平成24年度春季医学会抄録参照）。現今、これらの患者に対して人工的栄養・水分補給の開始／非開始／中断を含む延命治療について関連学会は一定の指針を提示し、尊厳ある生・死を遂げるため患者自身の意思が最重要であるとしている。私たちは延命治療を望まないとする選択肢の一方延命治療下に行っている終末期リハビリテーションはいずれも患者の尊厳を保証し命の質を保つ上で車の両輪をなしていると考える。今回、進行期パーキンソン病等患者の胃瘻造設における意思決定過程について症例を通して考察した。代表例；80歳代、女性。13年前パーキンソン病。6年前大腿骨頸部骨折を契機にADL低下し異常感覚・妄想出現。3年前入院、車椅子に移乗しトイレで排泄。1か月前誤嚥性肺炎を併発、家族は「本人が以前に胃瘻造設を希望しないと表明していた」と言い、点滴で対応。しかし本人は造設希望をふともらし家族の意向を気にする。家族は本人の意向を再確認し事後の継続入院を担保され了承。経鼻管栄養に切り替え7日後に造設。結論：長生きしているが健康で自立しているとはいえない高齢者の意思決定過程において大きく作用したのは患者本人と家族の長年にわたる関係性およびケア体制であった。

16) ホスピタウンにおける百寿者の健康管理について

米子市 真誠会セントラルクリニック <sup>なかしたえいのすけ</sup> 中下英之助 小田 貢

高齢社会が進行しており、100歳を迎えた高齢者（百寿者）が増加している。平成23年7月から12月の半年間におけるホスピタウンの百寿者は14例（男1例、女13例）施設入所8例、通所4例、通院2例であった。機能的には自立、認知症なしが2例、認知症あり見守りや杖手引き移動5例、認知症あり車いす移動4例、寝たきり3例であった。百寿者の基礎疾患、発症時期、ADL、介護環境について検討した。百寿者は要介護認定の時期が遅く、白内障、骨折、高血圧症などの治療可能な疾患が多く、老化の進行が遅く、認知機能の低下はあるが、自立度、排泄管理方法は他の利用者と変わりがなかった。主介護者（息子、嫁など）の高齢化や家庭環境が百寿者の在宅生活を困難にしていた。

## 特別講演

11:50~12:50 座長 学会長 角 賢一（博愛病院院長）

### 「消化器癌における機能温存手術とその問題点」

鳥取大学医学部器官制御外科学講座病態制御外科学分野

教授 池口正英先生

消化器癌の手術は、主病巣切除とリンパ節郭清が基本であり、日本の外科医の手術手技は世界に冠たるものであると言える。その証拠に、胃癌や大腸癌における5年生存率は世界標準を遙かに上回っている。従来から消化器癌手術には安全性と根治性が求められてきた。さらに近年では、社会的要求として低侵襲性や機能温存が求められるようになってきている。われわれは、腹腔鏡手術やロボット支援手術をより駆使発達させて、社会の要求に応じていく必要がある。今回、私たちが行っている、頭頸部領域癌における咽頭、喉頭、頸部食道全摘後の遊離空腸移植再建手術、腹腔鏡を用いた胃癌における機能温存手術、肛門に近い直腸癌で、肛門機能を温存した内肛門括約筋温存手術を供覧すると共に、その問題点について言及する。

われわれの施設では全国的にも早くにダ・ビンチSを導入し、泌尿器科、消化器外科、胸部外科、女性診療科がロボット支援手術を展開している。消化器外科領域では、胃癌、直腸癌手術にダ・ビンチSを用いているが、その内容についても紹介したい。





URL : <http://www.tottori.med.or.jp/>